深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　句切れに注意しながら、それぞれの歌を音読してみよう。

▼ポイント▲　意味を考えながら、それぞれ二回程度音読させる。音読によって、歌の内容についての概略を理解するように指導する。また、理解できなかった点について認識させる。

2　「紫の」の歌（二五八・5）は、「あかねさす」（二五八・3）の歌と呼応している。どのように呼応しているのか、考えてみよう。

【答】「あかねさす」（額田王）の歌の中で「君が袖振る」として詠まれている「君」を受けて、大海人皇子（後の天武天皇）が「君」の立場で答えた歌である。大海人皇子は、額田王（人妻）への恋心を詠んだという形になっている。

▼ポイント▲　一見すると不倫関係があるように見えるが、額田王は、実際には大海人皇子（後の天武天皇）の妻なので、宴席上での戯れ歌という解釈もある。

3　「誰かまた」の歌（二六三・4）と、その本歌である「五月待つ」の歌（二六一・2）を比較し、本歌取りの効果について説明してみよう。

【答】花橘の香りによって喚起される思いを歌う本歌を踏襲しながら、現在の自分の心もとない思いを詠んでいる。本歌を感ずることで、現在の思いを重層的に歌うことができる。

▼ポイント▲　本歌は教科書掲載の歌（古今和歌集）から読み取ることができるが、同じ歌が伊勢物語にも掲載されているので、そちらも参考にすることができる。

4　「ふるさとの訛りなくせし」の歌（二七一・2）が踏まえている歌を、この教科書掲載歌の中で指摘し、その手法の効果について説明してみよう。

【答】石川啄木「ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆく」（二六九・8）が踏まえられている。

啄木は故郷への懐かしさを歌った。一方の修司は、啄木と同じように故郷に思いを馳せながら、故郷を忘れていく友への違和感を歌い、自身もまた、都会に身を委ねる存在であることへの複雑な心境を詠んだ。啄木の歌を想起させ対照することによって独自性を打ち出すことに成功している。

▼ポイント▲　短歌の場合、「本歌取り」という表現はしないが、短歌においても、先人の歌を踏まえることで一首の世界を広げて

いることを理解させたい。啄木の歌は人口に膾炙されているので、生徒が二つの歌のつながりを見出すのは容易と思われる。聞き慣れた歌の中で「本歌取り」への理解を深めたい。

5 **「和歌」の中で、係り結びを用いている歌を指摘し、現代語に訳してみよう。**

【答】

「時じくそ～雪は降りける」（二五九・４山部赤人　長歌）
「ま白にそ～雪は降りける」（二五九・７山部赤人　反歌）
「なにそ～ここだかなしき」（二五九・11東歌）
「風や～とくらむ」（二六〇・７紀貫之）
「袖の香ぞ～する」（二六一・２よみ人知らず）
「風の音にぞ～おどろかれぬる」（二六一・５藤原敏行）
「冬ぞ～寂しさまさりける」（二六一・９源宗于）
「寝（ぬ）ればや～見えつらむ」（二六一・11小野小町）
「魂かとぞ～見る」（二六二・８和泉式部）
「誰か～思ひ出でむ」（二六三・４藤原俊成）
「弱りもぞ～する」（二六四・２式子内親王）

▼ポイント▲　「言葉ぜ～忘れかねつる」（二六〇・４防人歌）も係り結びとなっている。「ぜ」は、「ぞ」の訛りとして使用されていると考えられている。

歌では感動を表すために係り結びも多く使用されることがわかる。すべてを網羅的に取り上げるのではなく、歌ごとに理解できればよいだろう。現代語訳については、各歌の注釈参照。

6 **「短歌」の中で、助詞「や」「よ」「ぞ」「かも」を用いている歌を指摘し、それらの働きに留意して、作者の心情を読み取ってみよう。**

【答】（現代語訳はそれぞれの歌の注釈を参照する。）

晶子二首目「さびしからずや」（疑問・反語）
牧水一首目「寂しからずや」（疑問）
牧水二首目「終てなむ国ぞ」（強意）
啄木一首目「砂のかなしさよ」（詠嘆）
茂吉二首目「なりにけるかも」（詠嘆）
修司二首目「祖国はありや」（疑問・反語）

▼ポイント▲　言語文化という観点から、和歌や古文で使用されている表現方法（そのままではないものの）を引き継ぎなら、近代短歌が詠まれていることを認識することは大切だろう。さらに、助詞を理解することで、短歌で詠まれている作者の心情を深く受け止めることができるはずだ。各歌を解釈するときに考えさせてもよいだろう。作者の心情については各歌の注釈参照。

言葉と表現の解答例

1 **次の枕詞について、そのイメージを話し合ってみよう。**

(1)あかねさす（二五八・3）
(2)ひさかたの（二六〇・9）
(3)ちはやぶる（二六一・7）
(4)足乳根の（二七〇・2）

【答】

(1) あかねさす（茜さす）⬇赤く美しく輝くイメージ
(2) ひさかたの（久方の）⬇ひろびろとして広大なイメージ
(3) ちはやぶる（千早ぶる）⬇勢いが激しいイメージ
(4) 足乳根の⬇乳が十分に足りているイメージ

▼ポイント▲　枕詞に「意味」はないとされているが、言外にイメージが付与されていることも感じさせたい。なお、「たらちねの」は一般的に「垂乳根の」と書き意味不詳である。茂吉はそれを「足乳根の」と書いて、意味を込めた枕詞とした。

2 **1で話し合った枕詞のほかに、どのような枕詞があるか、調べてみよう。**

【答】「うつそみの」「あまづたふ」「ももしきの」「ぬばたまの」「あしひきの」「はははそはの」「ちちのみの」等。

▼ポイント▲　各自で調べた枕詞について、さまざまに考察したい。先に指摘したイメージのほか、「母」を誘導するための「ははそはの」、「父」誘導するための「ちちのみの」など、同音の反復による枕詞があることなどについても考えることができるだろう。

（小倉真理子）